

土地分類基本調査

「八幡」

5万分の1

国土調査

岐阜県

1995

序 文

この調査は、国土調査法に基づき国土の開発及び保全並びにその利用の高度化に資するために、国土の実態を科学的かつ総合的に調査したものです。

本県は、昭和57年度からこの調査を実施し、40の調査対象図幅のうち既に18図幅について印刷を完了しています。本書は、平成5年度から平成6年度にかけて調査した5万分の1地形図「八幡」について、八幡図幅として取りまとめたものです。

この調査の実施にあたって協力いただいた関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、この成果が今後、県土の秩序ある発展を図るための企画・立案の基礎資料として広く活用されることを希望します。

平成8年3月

岐阜県企画部長 岩垣 儀一

ま え が き

1. 本調査は、岐阜県が国土庁土地局国土調査課の指導を得て、実施したものです。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の3の規定による土地分類基本調査図及び土地分類基本調査簿です。
3. 本調査の実施及び成果の作成機関並びに担当者は、下記のとおりです。

記

総括	岐阜県企画部地域振興課			
地形分類調査	岐阜大学教育学部	教 授	関根 清	
表層地質調査	〃	教 授	梶田 澄雄	
	〃	助 教 授	小井土由光	
土 壤 調 査	岐阜県農業総合 研究センター	部 長 研 究 員	広瀬 修	
	岐阜県林業センター	主任専門研究員	中川 一	
	〃	主 任 技 師	川尻 秀樹	
	〃	主 任 技 師	茂木 靖和	
土 地 利 用 現 況 調 査	岐阜大学農学部	教 授	綱本 皓二	

目 次

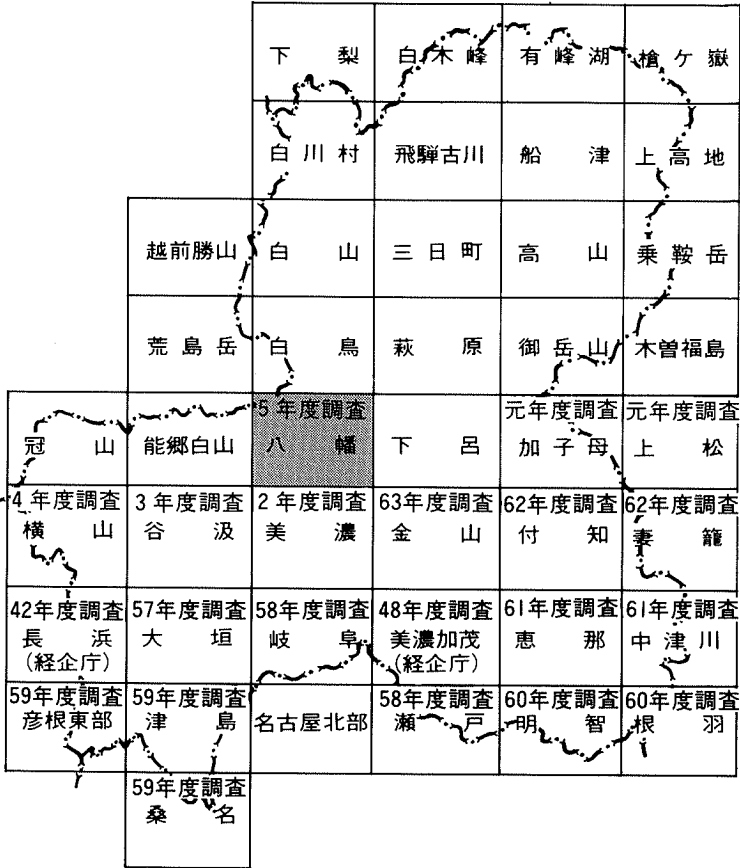
総 論

I 位置および行政区画	1
II 人 口	2
III 産 業	4

各 論

I 地 形 分 類	9
II 表 層 地 質	14
III 土 壤	18
IV 土地利用現況	33

位置図



総

論

I 位置及び行政区画

1. 位置

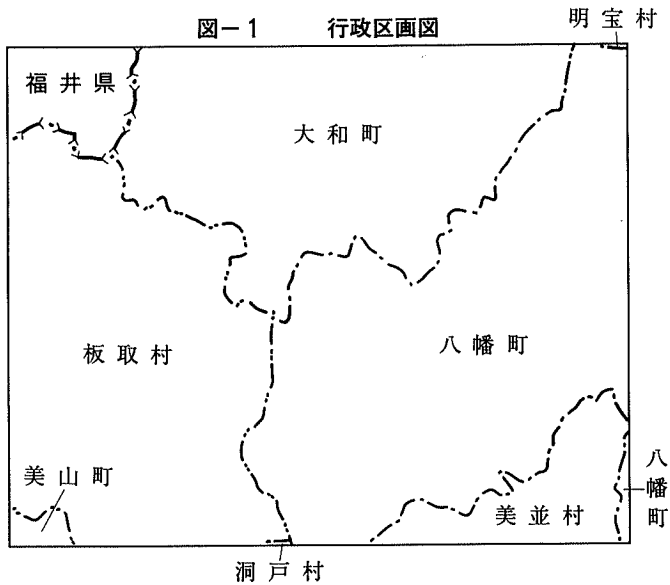
この調査の対象地域は、建設省国土地理院発行5万分の1地形図の「八幡」図幅である。

経緯度は、東経 $136^{\circ} 45'$ ～ $137^{\circ} 0'$ 、北緯 $35^{\circ} 40'$ ～ $35^{\circ} 50'$ の範囲である。

2. 行政区画

本図幅の行政区画は、美山町、洞戸村、板取村、八幡町、大和町、美並村及び明宝村の3町4村であり、それぞれの行政区画の一部からなっている。

(図一1 参照)



Ⅱ 人 口

調査区域にかかる 3 町 4 村の人口は46,087人（平成 7 年国勢調査結果速報）で、県人口の2.2%を占めている。

これらの全町村では、昭和55年から平成 7 年までに3,700人減少している。県平均で7.2%増加しているのに対し、7.4%の減少となっており、この地域全体で過疎化が進んでいる。

表一 1 人口

区 分 行政区域	昭 和 55 年		昭 和 60 年		平 成 2 年	
	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)	人 口 (人)	世帯数 (戸)
美 山 町	10,832	2,778	10,507	2,742	10,015	2,685
洞 戸 村	2,706	760	2,693	766	2,555	752
板 取 村	2,301	664	2,278	665	2,089	645
八 幡 町	18,813	5,400	18,230	5,367	17,620	5,317
大 和 町	7,190	1,723	7,244	1,752	7,112	1,793
美 並 村	5,586	1,230	5,563	1,242	5,559	1,277
明 宝 村	2,359	573	2,266	566	2,171	554
計	49,787	13,128	48,781	13,100	47,121	13,023
県 計	1,960,107	539,740	2,028,536	567,946	2,066,569	602,906

なお、平成7年国勢調査結果速報によると、八幡町、大和町、美並村及び明宝村の郡上郡地域では人口の減少が鈍化傾向にあるが、他の3町村では減少傾向が著しい。（表—1）

平成7年		人口増減(人)			人口増減率(%)		
人口 (人)	世帯数 (戸)	55～60年	60～2年	2～7年	55～60年	60～2年	2～7年
9,623	2,662	△ 325	△ 492	△ 392	△ 3.0	△ 4.7	△ 3.9
2,444	737	△ 13	△ 138	△ 111	△ 0.5	△ 5.1	△ 4.3
2,003	636	△ 23	△ 189	△ 86	△ 1.0	△ 8.3	△ 4.1
17,262	5,513	△ 583	△ 610	△ 358	△ 3.1	△ 3.3	△ 2.0
7,097	1,882	54	△ 132	△ 15	0.8	△ 1.8	△ 0.2
5,504	1,363	△ 23	△ 4	△ 55	△ 0.4	△ 0.1	△ 1.0
2,154	558	△ 93	△ 95	△ 17	△ 3.9	△ 4.2	△ 0.8
46,087	13,351	△ 1,006	△ 1,660	△ 1,034	△ 2.0	△ 3.4	△ 2.2
2,100,333	645,073	68,429	38,033	33,764	3.5	1.9	1.6

資料 昭和55年、昭和60年及び平成2年の数値は、国勢調査結果による。

平成7年の数値は、平成7年国勢調査結果速報による。

Ⅲ 産 業

1 農林業

地域内の町村の総農家数は、3,812戸で、これは県下総農家数の4.2%にあたり、専業農家の割合は県平均の4.8%を下回る3.7%となっている。また、経営耕地面積は2,172haで、県下総経営耕地面積の3.3%を占め、農業粗生産額は県下全体の2.8%となっている。

この地域の農業粗生産額の生産種別構成を県下全体と比較すると、野菜がやや低く畜産が高くなっている。町村別の特色を見ると、板取村では畜産による農業粗生産額がなく、米並びにナス及び大根を中心とした野菜の構成比が高くなっている。美山町では豚及び鶏、洞戸村では乳用牛、明宝村では肉用牛を中心とした畜産の構成比が高くなっている。また、洞戸村では、キウイフルーツを中心とした果実の構成比が高く、八幡町では花きの構成比が高い。(表一2)

表一2 農業の概要

区分 行政区域	農 家 数				経営耕地面積 (ha)	農業粗生産額 (百万円)				
	総 数 (戸)	専業 (戸)	兼 業 (戸)	専業率 (%)		総 額	米	野菜	畜産	その他
美山町	457	14	443	3.1	281	597	129	66	362	40
洞戸村	211	14	197	6.6	91	226	42	23	123	38
板取村	129	2	127	1.6	81	59	32	20	—	7
八幡町	1,084	39	1,045	3.6	628	1,126	426	157	330	213
大和町	980	35	945	3.6	539	791	496	121	74	100
美並村	602	17	585	2.8	253	407	197	86	71	53
明宝村	349	19	330	5.4	299	991	126	146	577	142
計	3,812	140	3,672	3.7	2,172	4,197	1,448	619	1,537	593
県 計	91,435	4,431	87,004	4.8	64,900	158,283	53,835	38,456	45,184	20,808

資料 岐阜県農林水産統計年報(平成6～7年)による。(農家数は、「1995年世界農林業センサス」結果により、兼業農家には、自給的農家を含んでいる。)

林業については、地域内の町村の林野面積が94,198haで、県下総林野面積の10.8%を占めている。

また、民有林の比率は98.0%で、県平均の79.0%に比べ非常に高くなっている。民有林のうち人口林の比率は、板取村を除く町村で県平均より高く、この地域全体では55.5%で、県平均の43.9%を大きく上回っている。

(表-3)

表-3 林業の概要

区分 行政 区域	林 野 面 積 (ha)				林 家 数 (戸)
	総 数	国 有 林	公 有 林	私 有 林	
美 山 町	14,531	656	676	13,199	935
洞 戸 村	3,558	65	75	3,418	256
板 取 村	18,258	412	1,363	16,483	436
八 幡 町	22,334	141	465	21,728	1,590
大 和 町	13,863	165	548	13,150	1,239
美 並 村	7,000	71	620	6,309	887
明 宝 村	14,654	410	749	13,495	440
計	94,198	1,920	4,496	87,782	5,783
県 計	868,770	182,094	69,727	616,949	64,537

資料 平成5年度岐阜県林業統計書による。(林家数は、「1990世界農林業センサス、林業事業体調査」の結果による。)

2 工 業

この地域の事業所数は、県全体の3.8%にあたる967事業所、従業員数は7,167人で、県全体の2.6%となっている。また、年間製造品出荷額は、1,058億円で、県全体の1.9%となっている。

この地域の1事業所あたりの平均従業員数は7.4人で、県平均の11.0人を3割程度下回っており、比較的規模の小さい事業所が多い。また、従業員1人あたりの年間製造品出荷額等も1,476万円で、県平均の1,987万円を25.7%下回っている。(表-4)

表-4 工業の概要

区分 行政区域	事業所数				従業者数(人)			年間製造品 出荷額等 (百万円)
	総数	会社	組合その他 の法人	個人	総数	常労働者	個人事業主 及び家族 従業員	
美山町	385	71	1	313	2,382	1,851	531	38,170
洞戸村	68	9	—	59	433	324	109	6,033
板取村	65	6	—	59	247	132	115	1,023
八幡町	210	80	3	127	2,006	1,803	203	25,908
大和町	107	31	—	76	796	675	121	9,132
美並村	104	35	—	69	1,082	976	106	23,963
明宝村	28	5	2	21	221	194	27	1,524
計	967	237	6	724	7,167	5,955	1,212	105,753
県計	25,150	9,078	259	15,813	277,348	251,813	25,535	5,510,403

資料 平成5年工業統計調査結果による。

3 商 業

商店数は883店舗で、県下総商店数の2.5%、年間販売額は531億円で、県全体の0.9%となっている。商店のうち卸売業の占める割合は10.3%で、県平均の23.4%を大きく下回っている。

従業員1人あたりの年間販売額は1,749万円で、県平均の3,284万円を大きく下回っており、洞戸村、板取村では県平均の約3割となっている。(表—5)

表—5 商業の概要

区 分 行政 区域	商 店 数			従 業 者 数 (人)	年 間 販 売 額 (百万円)
	総 数	卸 売 業	小 売 業		
美 山 町	136	16	120	403	6,714
洞 戸 村	49	1	48	208	2,157
板 取 村	30	1	29	49	520
八 幡 町	454	53	401	1,651	31,130
大 和 町	103	16	87	423	8,007
美 並 村	83	4	79	226	3,263
明 宝 村	28	—	28	77	1,314
計	883	91	792	3,037	53,105
県 計	34,890	8,163	26,727	185,791	6,100,767

資料 平成6年商業統計調査結果による。(代理商・仲立業を除く。)

各 論

I 地 形 分 類

1 地形概説

ユーラシア大陸の縁辺部に位置し、弧状列島からなる日本は、プレート論的観点からは太平洋プレート・フィリピンプレートとアジアプレートとの会合部に位置していることになる。そのために東北地方から中部地方を経て近畿地方北部に至る地域は、応力場的にはほぼ東西の最大圧縮応力場に位置する地域といえる。このような地殻運動の影響をうけて、曲隆と曲降の地形が規則的に配列し、個々の山地の尾根や河谷などの地形にも、その配列や分布に規則性が認められる。これらの曲隆・曲降地形の波長は、約70~100kmのひろがりをもっている。本図幅はこのような自然環境の曲降性の山地内に位置してゐる。

本図幅の山地は富山から伊勢湾に至る地域に分布する曲降性の山地である美濃山地を含むものの、主として美濃越前山地の東部に位置する山地からなっている。上述したように、これらの山地や河谷は東西圧縮応力場の曲隆・曲降の地殻運動や断層運動の特徴を反映して、全体的には北西~南東、北東~南西方向及び南北方向に配列する特徴を有している。

美濃越前山地は、南端部の山地において適応単位丘的地形からなる老年期または晩壮年期の地形を示すものの、全体的には壮年期の定高性の山地を形成している。この山地は中・古生界のチャート、砂岩、粘板岩などの互層と奥美濃酸性岩類（面谷流紋岩類）などの地質からなり、南東部（本図幅外）においては地質構造を反映して、風化・侵蝕に対する抵抗性の差異に起因した組織地形がみられる。これらの組織地形は稜部と凹部とが交互に配列し、局部的には舟窪状の形態を示す数個の地形単位から成りたっている。

上述したように、中部地方のような東西圧縮応力場の環境下では、曲隆・曲降運動の進展に伴って、傾斜の変換点の区域には帯状に応力が集中し、歪みの蓄積のために逆断層が多発し、曲隆部の地塊を一層隆起させ、断層山地が形成される。それ故に、曲隆部と曲降部との境には南北方向の逆断層が認められる場合が多い。これらの逆断層と共役関係にある副断層がこれにほぼ

直交・斜交状に発生している。

また、急激な圧縮応力が加わる環境下では、応力軸に斜交する剪断応力性の断層と考えられる横ずれ断層が多発するようになる。このために、東西圧縮応力場の中部地方においては、北東～南西、北西～南東方向のA級活動度の横ずれ逆断層も卓越している。以上のように、地殻運動の特徴を反映させて中部地方における断層運動は大局的には南北方向、東西方向、北東から南西方向、北西から南東方向への断層系として捉えることができる。上述した曲隆・曲降性の大地形はこれらの断層運動によって山塊状に細分され、それぞれの断層系の運動形態を反映させている。

本図幅の美濃越前山地には、地震災害的には活動度がB級の活断層、八幡断層などがほぼ北西から南東方向に位置している。また、本図幅内には多数の活断層としての断層地形や地形的断層線を想定させるリニアメントも卓越してゐる。

台地は河谷沿いに分布する河岸段丘からなる。本図幅内には長良川水系の本流河谷と支流の板取川河谷が位置しているが、両河谷において河岸段丘地形が発達している。これらの段丘地形は3段の段丘地形からなっているので、ここでは地形面の河床からの高度（比高）によって、上位段丘、中位段丘、下位段丘に便宜的に細分した。なお、郡上八幡の北、大和町内に位置する部落谷川沿いには、八幡断層の活動に起因して生産されたと推定される岩屑からなる隆起扇状地性の中位段丘が発達しているが、この中位段丘は八幡断層に付随する副断層（地形的リニアメントから）によって下位段丘が断層変位した地形の可能性も考えられる。

2 山 地

本図幅の山地は、上述したように、大局的には富山から伊勢湾に至る曲隆部に位置する山地からなり、美濃越前山地の東部と西部美濃山地の一部からなりたっている。山地内の河谷は、中部地方の断層運動の特徴を反映して、全体的には北西～南東、北東～南西方向及び南北方向に流れる河谷の分布的特徴を有する。このために、本図幅内の山地は、これらの河谷によって区分

された小山塊に細分される。

本図幅内の山地をここでは便宜的に、美濃越前山地、位山分水嶺山地、郡上・美濃山地に細分した。

(1) 美濃越前山地 (I a)

美濃越前山地は能郷白山(1617m)を主峰とし、それらの頂稜部が海拔高度1200m～1400m内外の定高性の壮年期山地で、日本海側と太平洋側との地形的・気候的分水嶺を形成している山地であるが、本図幅の北西部内には美濃越前山地の北東部主稜線に位置する滝波山(1412.5m)が含まれており、本図幅の山地は滝波山とその付近の主稜線から派生する1000m内外の山稜部からなる山地が主要部を構成している。山稜線や河谷の方向は北西～南東と北東～南西方向のものが卓越している。

(2) 位山分水嶺山地 (I b)

位山分水嶺山地は行政的には北飛驒と南飛驒との境界を形成しているものの、地形的・気候的には飛驒と美濃との分水嶺を形成している山地である。地形的には日本海側と太平洋側との地形界を、気候的には日本海気候と太平洋気候との気候界を形成している山地である。

本図幅内には鷲ヶ岳(1672m)と烏帽子岳(1625m)との主稜線から南西に派生する山稜の南西部の800m未満の山地が位置している。

(3) 郡上・美濃山地 (I c)

郡上・美濃山地は西を長良川本流、北を吉田川、東、南を飛驒川の支流、馬瀬川と長良川の支流の津保川で境される北高南低の高度約1000m以下の南北稜山地であるが、本図幅では600m未満の山地からなる。

3 台地

本図幅の台地は、長良川水系の本流河谷と支流の板取川河谷内に分布する河岸段丘からなる砂礫台地である。前者の台地上には、郡上八幡町と白鳥・

大和両町の集落の主要部が位置している。形成時期の異なる3段の河岸段丘からなる台地である。形成時期の古い段丘ほど同一断面においては、高位に位置し、より長い侵蝕作用を受けているために、地形面の保存状況は当然のことながら悪くなっている。

なお、本図幅の板取川河谷内の河岸段丘は、断続的に分布するものの規模的には小規模なので、長良川本流河谷内にみられるような河岸段丘台地の扱いを省略した。

それ故、ここでは、河岸段丘の分布状況と行政単位を考慮して便宜的に、郡上八幡台地（Ⅱa）と白鳥・大和台地（Ⅱb）に細分した。

(1) 郡上八幡台地（Ⅱa）

この台地は、地形的には長良川上流域の小谷底平野（長良川本流と支流吉田川との合流部とその周辺の谷底部）に分布する河岸段丘からなる沖積台地である。本図幅内にはこの台地の主要部が位置している。3段の河岸段丘からなる砂礫台地であるが、上位段丘の残存状況は著しく限定されている。

(2) 白鳥・大和台地（Ⅱb）

この台地は、地形的には長良川上流域の小盆地及び、小谷底平野（複数の河谷合流部とその周辺の谷底部）に分布する河岸段丘からなる沖積台地である。本図幅内には後者の下流部のみが位置している。3段の河岸段丘からなる砂礫台地であるが、上位段丘の残存状況は著しく限定されている。

上述したように、大和町内に位置する部落谷川沿いには、八幡断層の活動に起因して生産されたと推定される岩屑からなる隆起扇状地性の中位段丘が発達しているが、この中位段丘は八幡断層に付随する副断層（地形的リニアメントから）に起因する断層変位した下位段丘の可能性も考えられる。

4 参考文献

棚瀬充央(1982)：奥美濃酸性岩類一両白山地における白亜紀火成作用一、地質雑、88-2、pp.271-288

松田時彦、中村一明、杉村新(1978)：活断層とネオテクトニクス、
地球科学10 (変動する地球I)、pp.89-158、岩波書店
藤田和夫(1983)：日本の山地形成論、466p.、蒼樹書房

Ⅱ 表層地質

1 表層地質概説

本図幅地域に最も広く分布しているのは固結堆積物の美濃帯中・古生層であるが、北部地域と南部地域とは大きな差がある。北半部は砂岩を主とし緑色岩・石灰岩は全く存在しないのに対し、南半部は砂岩の分布は少なく、頁岩・チャート・緑色岩・石灰岩等の分布が広く南北のそれぞれの地域が異なる起源を持っていることを示している。本来、緑色岩・石灰岩は大洋底に起源をもつ岩石であり、砂岩は陸地からの供給物に起源をもつ岩石である。

このような起源を異にする岩石・地層が隣接して分布することを説明するには同一場所での海陸の転化を示す一連の層相の変化が認められなくてはならないがそのようなものはない。したがって緑色岩をふくむ南部の地層がプレートによって北上し北部の砂岩優勢の地層に接するようになったと考えるのが妥当である。しかしこれは大筋の話で化石や岩相の詳細な検討によってさらに複雑な経過が解明されている（脇田 1984）。

美濃帯中・古生層を貫き、覆って「流紋岩質岩石」が分布する。それぞれ独立した6岩体に区分される。図幅内最大の分布を示すのは八幡町から大和町にかけて長良川西方に北北西—南南東に細長く伸びた分布を示す溶結凝灰岩を主体とする八幡岩体である。東縁は断層（八幡断層）によって限られている。滝波山、蕪山、高賀山、松谷洞付近にも同様の岩石が分布しいずれも標高1000mを越える山頂を有している。

図幅北東部の長良川と吉田川に囲まれた地域には鮮新世—更新世の「凝灰角礫岩または火山角礫岩」よりなる烏帽子火山岩類が分付する。これが分布する範囲は海拔400m—500mより高い所に比較的なだらかな地形をなしている。「凝灰角礫岩または火山角礫岩」は吉田川より南の八幡町稻成の山頂付近にも僅かに分布する。このことは吉田川の形成が烏帽子火山岩類の活動以後に始まったことを示している。

2 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

a) 礫がち堆積物 (g₁)

この図幅で礫がち堆積物としたものは、長良川・板取川およびそれらの支谷を埋積して分布する沖積層である。ほとんどが耕作地あるいは宅地として利用されている。

b) 礫がち堆積物 (g₂)

各河川ぞいにみられる河岸段丘がこれらに相当するが、図幅中で塗色するほどの広がりを持つ所は長良川ぞいの三日市・島 長良川と吉田川合流点付近である。礫は亜円～円礫が多い。

c) 碎屑物 (cl)

碎屑物には、八幡断層に伴うものがあり、断層活動の結果生じたものと考えられる。淘汰の悪い角礫・砂・粘土からなる。

この碎屑物を断層が切っており、八幡断層は活断層と考えられている。

(2) 固結堆積物

a) 凝灰質角礫岩または火山角礫岩 (tb)

図幅北東部に分布する。安山岩溶岩および同火砕岩よりなる「烏帽子岳火山岩類」の南端部に相当する。本図幅地域には、主として凝灰角礫岩が分布する。

吉田川を越えた稲成の山頂にまで分布するのは吉田川の形成時期を考える上で重要である。

b) 砂岩 (ss)

図幅中もっとも広範囲に分布するが南半部には少ない。厚層・塊状のものと砂岩優勢の砂岩・泥岩互層をなすものがある。チャート分布域に比較して

なだらかな地形をなすことが多い。

砂岩は本来強硬な岩石であるが風化が進みもろくなっていることが多い。新鮮な部分は碎石の原材として良好である。

c) 泥質岩 (sh)

美濃帯の中・古生層分布域としては比較的分布の少ない地域にあたる。特に図幅の北半分には少ない。

本来は「はなはだかたい岩石」であるが風化が進み非常にもろくなっていることが多い。

d) チャート (ch)

図幅内の分布は南半分に比較的多い。大略東西に帯状に分布する。極めて強硬で風化に強いためチャートの分布域は急峻な山地を成すことが多い。地形図上露岩の記号のあるところはチャートであることが多い。厚さ3～5cmの層が薄い泥質物をはさんでくりかえし互層し、小褶曲をすることが多い。

e) メランジ (m)

図幅南東辺に分布する。泥質の基質中に砂岩・チャートなどのブロックが雑然と入っている。成因についてはいろいろ考えられるが、図幅内のものは海底での地滑りによるものであろう。

本来は「はなはだかたい」岩石であるが風化が進み非常にもろくなっていることが多い。

f) 石灰岩 (ls)

図幅南半分地域に略東西方向に点々と分布する。玄武岩溶岩および火山性碎屑岩に伴うことがおおい。八幡町安久田から美山にかけてはやや広い分布をなし、多くの鍾乳洞が形成されている。

g) 玄武岩溶岩および火山性碎屑岩 (sch)

かつての大洋底に噴出した玄武岩溶岩と凝灰質碎屑物の残片と考えられている。緑灰色のことが多く、かつては輝緑凝灰岩と呼ばれていた。その色調から単に緑色岩と呼ぶこともある。上記の石灰岩と密接に伴って産出することが多い。

本来「はなはだかたい」岩石であるが風化が進みもろくなっていることが多い。

(3) 火山性岩石

a) 流紋岩質岩石 (Ry₁)

美濃帯中・古生層を貫き、覆って分布する。それぞれ独立した6岩体に区分される。図幅内最大の分布を示すのは八幡町から大和町にかけて長良川西方に北北西-南南東に細長く伸びた分布を示す溶結凝灰岩を主体とする八幡岩体である。その他、滝波山、燕山、高賀山、松谷洞付近にも同様の岩石が分布しいずれも標高1000mを越える山頂を有している。

全体に「はなはだかたい」岩石である。

(4) 深成岩

a) 花崗岩質岩石 (Gr)

図幅西縁の川浦谷流域に分布するストック状岩体で周りの岩石・地層に熱変成を与えている。優白色中粒塊状の花崗岩で花崗斑岩と呼ぶべき部分も少なくない。

3 資料

下記の資料に詳しい。

脇田 浩二 (1984) 八幡地域の地質・地域地質研究報告
(5万分の1図幅) 地質調査所、89p.

Ⅲ 土 壤

林 地 土 壤

本図幅の地形は、美濃山地が中央部、西部に広く分布し、北東部に白山火山地、飛騨山地が分布し、南東部に美濃高地が小面積分布する。本図幅内の標高は、約160～1,400mであり、最も高い標高は図幅の北西に位置する滝波山1,412mである。本図幅の岐阜県内の河川は、全て長良川水系である。図幅の東部を長良川の本流が南に流下する。中央部には亀尾島川が北西から南東に流下し、那比川が東に流下して本流に合流する。図幅の西部を板取川が南に流下する。

地質は、図幅全体に中、古生界の堆積岩が広く分布する。中生界の溶結凝灰岩（流紋岩類）は、図幅全体に斑状に分布する。図幅の北東部に安山岩が分布する。西部には花崗岩類が小面積分布する。

本図幅に出現する土壌は、地形、地質構造と密接な関係を示し、表一 1 土壌統一覧表のとおり 6 土壌群、9 土壌統群に分けられる。褐色森林土が図幅全体に広く分布し、大部分の面積を占める。岩石地は、崩壊地等の露岩地に分布する。岩屑土は、溪床や急傾斜な岩盤の下部に分布する。黒ボク土は、山麓を中心として緩斜面に分布する。ポドゾルは、標高約1,000mを越える山地の尾根に分布する。赤黄色土は、石灰石、緑色岩地域など緩傾斜の尾根、緩斜面に分布する。

1 岩石地

岩石地は、溪流、斜面の急傾斜地の場合が多く、チャート、花崗岩等の露岩地である。植生は少なく、ネジキ、ススキ、タニウツギ、ウツギ、ウスノキ、リヨウブ、ヤマグルマ等が散生する。図幅全体に小面積分布する。

2 岩屑土

岩屑土は、岩屑土壌があり、崖錐下部および溪床に分布する。数十cm～

数mの角礫が表層に厚く堆積する。植生は疎林で、ウツギ、ウラジロガシ、ケンボナシ、ケヤキ、ヤマシバカエデ、シロモジ、アセビ、ムラサキシキブ、スゲ類等が生育する。図幅の全体に小面積分布する。

3 黒ボク土

黒ボク土は、黒ボク土壌が分布し、山麓の緩斜面に多く分布する。植生は、スギ、ヒノキ人工林が多い。下層植生は、アオキ、イヌツゲ、コシアブラ、コアジサイ、ヤマツツジ、シシガシラ、トコロ、ワラビ等が生育する。

黒ボク土壌は、Bl_b(d)、Bl_b型土壌が多い。A層は、30cm以上と厚く、明度1～2と黒い。A層の構造は、団粒状構造または堅果状構造を示すことが多い。土性は壤土が多い。土壌生産力が高いが、ヒノキ人工林では徳利病が発生することが多い。図幅の中央部、北東部に小面積分布する。

4 褐色森林土

褐色森林土は、3土壌統群あり、図幅の大部分を占める。乾性褐色森林土壌は、山地の尾根、斜面上部に分布する。褐色森林土壌は、山地の斜面に広く分布する。湿性褐色森林土壌は、斜面下部に分布する。

(1) 乾性褐色森林土壌

乾性褐色森林土壌は、B_A、B_B、B_C型土壌に相当し、曾木統、貝戸1統、高戸山1統、片知1統、笠置1統、古道1統の6統が分布する。土層上部は、乾性な細粒状、粒状、堅果状構造が発達する。粒状構造のよく発達するB_B型土壌、堅果状構造の発達するB_C型土壌の分布が多い。土壌生産力は低い。

植生は、針広混交林となることが多い。混交する上木は、アカマツ、ヒメコマツ、ヒノキ等の針葉樹、ブナ、ミズナラ、コナラ、クリ、タカノツメ、リョウブ、タムシバ等の広葉樹である。下層植生は、アオハダ、ウリカエデ、ツクバネウツギ、シロモジ、ネジキ、イヌツゲ、ベニドウダン、ヤマツツジ、ササ類、ヤマソテツ、イワウチワ等が生育する。

① 曾木統

主に中生界の砂岩、泥質岩、チャート等を母材として起伏量の小さい山地の尾根、斜面上部に分布する残積性の土壌である。A_o層は、一般に10cm以上と厚く、特にF、H層がよく発達するが、未熟性の強い土壌ではほとんど発達しない。曾木統は、土層上部で粒状構造、堅果状構造が発達するB_B型土壌が多く分布する。しかし、チャートのヤセ尾根には、土層上部で細粒状構造の発達するB_A型土壌がよく発達し、とりわけ生産力が低い。土性は、母材により異なり、砂質壤土から埴土である。図幅の南東部に小面積分布する。

② 貝戸1統

主に中生界の堆積岩を母材として起伏量の大きい山地の尾根に多く分布する残積性の土壌である。A_o層は、L、F、H層が発達する。土性は、埴質壤土から埴土である。土層上部で粒状構造、堅果状構造が発達するB_B型土壌、A層とB層で堅果状構造のよく発達するB_C型土壌が多い。図幅全体に分布する。

③ 高戸山1統

主に花崗岩類を母材として山地の尾根、斜面上部に分布する残積性の土壌である。A_o層は、約10cmと厚く、L、F、H層がよく発達する。土性は壤土から砂質壤土が多い。図幅の中、西部に小面積分布する。

④ 片知1統

面谷流紋岩類を母材として、山地の尾根に分布する残積性の土壌である。B_B型土壌が多く、A_o層が厚い。B_C型土壌では、A_o層が薄く、A層が約20cmと比較的厚い。土性は埴壤土が多い。図幅の西部、中央部に分布する。

⑤ 笠置1統

濃飛流紋岩類を母材として、山地の尾根に分布する残積性の土壌である。B_B型土壌が多い。各層位に角礫が多い。土性は埴壤土から壤土である。図幅

の北東部に小面積分布する。

⑥ 古道 1 統

安山岩類を母材として、山地の尾根に分布する残積性の土壌である。B_A、B_B型土壌ではA_o層が厚く、A層の発達しないことが多い。B_C型土壌では、A_o層が薄く、A層が約20cmと比較的厚い。半角礫の多い土壌である。土性は壤土が多い。図幅の北東部に小面積分布する。

(2) 褐色森林土壌

褐色森林土壌は、B_D、B_D(d)型土壌に相当し、久田見統、貝戸 2 統、高戸山 2 統、片知 2 統、笠置 2 統、古道 2 統の 6 統が分布する。A層は、比較的厚く、団粒状構造が発達することが多い。土壌生産力が高い。

植生は天然広葉樹林、スギ、ヒノキ人工林が多い。広葉樹林には、ブナ、コナラ、ミズナラ、シデ類、クリ、サクラ類等が生育する。下層植生は、バイカツツジ、フユイチゴ、ハイイヌガヤ、クロモジ、ダンコウバイ、ジュウモンジシダ等が発育する。

① 久田見統

主に中性界の砂岩、泥質岩、チャートを母材として起伏量の小さい山地の斜面の中、下部に分布する。A_o層は、ほとんど発達しない。A層は、塊状構造から団粒状構造が発達する。土性は、埴壤土が多い。図幅の東南部に分布する。

② 貝戸 2 統

主に中生貝の堆積岩を母材として起伏量の大きい山地の斜面に多く分布する。A_o層は、一般にあまり発達しない。A層は、斜面上部、中部で塊状構造、斜面下部で団粒状構造が発達することが多い。土性は、埴質壤土が多い。図幅全体に分布する。

③ 高戸山 2 統

主に花崗岩類を母材として、山地の斜面の中、下部に分布する。A_o層がおおよそ 5 cm 以下で発達し、やや乾性な B_D(d) 型土壌が多い。A 層は、暗褐色で腐植の量が比較的少ないことが多い。A 層は、塊状構造、団粒状構造の発達することが多い。土性は、壤土から埴質壤土である。図幅の西部に小面積分布する。

④ 片知 2 統

面谷流紋岩類を母材として、山地の斜面に分布する。A_o層が発達せず、A 層で団粒構造の発達する B_D 型土壌が多い。土性は埴壤土が多い。B 層では角礫が多い。図幅の西部、中央部に分布する。

⑤ 笠置 2 統

濃飛流紋岩類を母材として、山地の斜面に分布する。A 層の色が淡くて薄く、A 層の発達の悪い B_D(d) 型土壌が多い。B 層では角礫が多い。

土性は壤土から埴壤土である。図幅の北東部に小面積分布する。

⑥ 古道 2 統

安山岩類を母材として、山地の斜面に分布する。A_o層がおおよそ 5 cm 以下で発達し、やや乾性な B_D(d) 型土壌が多い。A 層は、暗褐色で腐植の量が比較的少ないことが多い。A 層は、塊状構造、団粒状構造の発達することが多い。土性は、土壌から埴質壤土である。図幅の北東部に分布する。

(3) 湿性褐色森林土壌

B_E 型土壌が多い。A_o層は F 層が薄い。A 層は、団粒状構造で黒色が強く、30cm 以上と厚い土壌である。また、埋没土層が多く現れる。土性は砂土から壤土が多い。土壌生産力は高いが、ヒノキ人工林では徳利病が発生する。植生は、スギ人工林が多い。広葉樹林の上木には、トチノキ、ケヤキ、カツラ、オニグルミ、イタヤカエデ等が生育する。下層植生には、フサザクラ、キブ

シ、アカソ、タニウツギ、ヤブニンジン、アザミ類、ヨモギ、クサソテツ、リョウメンシダ等が生育する。

図幅の北西部に小面積分布する。

5 ポドゾル

ポドゾルは、A層に溶脱層、B層に集積層が認められる寒冷地の土壤で乾性ポドゾル化土壤、湿性ポドゾル化土壤がある。標高約1,000mを越える山地の尾根に分布する。

(1) 乾性ポドゾル化土壤

乾性ポドゾル化土壤は、 P_{D1} 、 P_{D2} 、 P_{D3} 型土壤に相当する。 A_0 層は、気温が低く、尾根の乾燥地のため落葉落枝が分解し難く、厚いF、H層が発達する。H層は、黒赤褐色、粒状である。B層上部には、下部よりもやや黒色の強い、鉄錆色の集積層が発達する。土性は、A層では壤土から砂質壤土、B層では埴土となる。土壤の生産力は非常に低い。

植生は、ブナ林、ミズナラ、ヒノキ、ヒメコマツ、コウヤマキ、ミズナラの混交する林が多い。上木には、タカノツメ、タムシバ等が生育する。下層植生には、シャクナゲ、ヒメアオキ、ウシカバ、ベニドウダン、サラサドウダン、イワウチワ、イチヤクソウ、マンネンスギ等が生育する。図幅全体に小面積分布する。

(2) 湿性ポドゾル化土壤

湿性ポドゾル化土壤は、 $P_w(h)_1$ 、 $P_w(h)_2$ 、 $P_w(h)_3$ 型土壤に相当する。 A_0 層は、尾根で標高が高く気温が低いいため落葉落枝が分解し難く、黒色脂質の厚いH層が発達する。A層上部は、多量の腐植を含むため黒色が強い。B層上部は、腐植が富化された暗鉄錆色の集積層が発達する。土性は埴土である。土壤の生産力は非常に低い。

植生は、ブナ林またはブナとヒノキが混交する針広混交林が多い。下層植生には、シャクナゲ、ゴヨウツツジ、ヒメアオキ、アカミノイヌツゲ、タム

シバ、ベニドウダン、サラサドウダン、イワウチワ等が生育する。図幅の北部に小面積分布する。

6 赤黄色土

赤黄色土には、暗赤色土壌が分布し、石灰岩、緑色岩地域の緩い尾根、斜面に分布するB層が赤色から暗赤色を呈する土壌である。

植生は、スギ、ヒノキ人工林、落葉広葉樹林が多い。下層植生には、アオキ、ナンテン、コクサギ、ハナイカダ、ヤブソテツ、ジャノヒゲ等が生育する。

① 安久田統

石灰岩を母材として、山地の緩い尾根、斜面に分布する残積性の土壌である。eDR_B、eDR_C、eDR_D(d)型土壌に相当する。A₀層が薄く、A層が約20cm以下で堅果状構造のよく発達するeDR_C、eDR_D(d)型土壌が多い。B層は、チョコレート色に近い暗赤色のものが多いが、母材が紅色の石灰岩の場合には赤色を呈する。土性は埴土である。図幅の南東部に小面積分布する。

② 新宮統

緑色岩を母材として、山地の緩い尾根、斜面に分布する残積性の土壌である。dDR_B、dDR_C、dDR_D(d)型土壌に相当する。A₀層が薄く、A層が約20cm以下で堅果状構造のよく発達するeDR_C、eDR_D(d)型土壌が多い。B層は赤色を呈する。土性は埴土である。図幅の南東部に小面積分布する。

表—1 土壤統一覽表

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	母 材	地 形
岩 石 地	岩 石 地	—	—	—
岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	—	—	崖錐の下部、溪床
黒ボク土	黒ボク土 壤	—	—	山地緩斜面
褐色森林土	乾性 褐色森林土壤	曾 木 統	中生界堆積岩	山地尾根、斜面上部
		貝 戸 1 統	中生界堆積岩	山地尾根
		高 戸 山 1 統	花崗岩	山地尾根、斜面上部
		片 知 1 統	面谷流紋岩類	山地尾根
		笠 置 1 統	濃飛流紋岩類	山地尾根
		古 道 1 統	安山岩類	山地尾根
褐色森林土壤	久 田 見 統	中 生 界 堆 積 岩	中生界堆積岩	山地斜面中、下部
		貝 戸 2 統	中 生 界 堆 積 岩	山地斜面
		高 戸 山 2 統	花崗岩	山地斜面中、下部
		片 知 2 統	面谷流紋岩類	山地斜面
		笠 置 2 統	濃飛流紋岩類	山地斜面
		古 道 2 統	安山岩類	山地斜面
	湿性 褐色森林土壤	—	—	山地斜面下部
ポドゾル	乾性 ポドゾル化土壤	—	—	山地尾根
	湿性 ポドゾル化土壤	—	—	山地尾根
赤黄色土	暗赤色土壤	安 久 田 統	石灰岩	山地尾根、斜面
		新 宮 統	綠色岩	山地尾根、斜面

林地土壤図

土壤統 凡例

土 壤 群	土 壤 統 群	土 壤 統	色	記 号
岩 石 地	岩 石 地	—		ア
岩 屑 土	岩 屑 性 土 壤	—		イ
黒ボク土	黒ボク土 壤	—		ウ
褐色森林土	乾性褐色森林土壤	曾 木 統		エ
		貝 戸 1 統		オ
		高 戸 山 1 統		カ
		片 知 1 統		キ
		笠 置 1 統		ミ
		古 道 1 統		ク
	褐色森林土壤	久 田 見 統		ケ
		貝 戸 2 統		コ
		高 戸 山 2 統		サ
		片 知 2 統		シ
		笠 置 2 統		ス
		古 道 2 統		ソ
		湿性褐色森林土壤	—	
ポドゾル	乾性ポドゾル化土壤	—		ナ
	湿性ポドゾル化土壤	—		ニ
赤黄色土	暗 赤 色 土 壤	安 久 田 統		ネ
		新 宮 統		ハ

農 地 土 壤

1. 地域の概要

本地域は岐阜県の北部に位置し、武儀郡板取村、郡上郡八幡町の大部分、大和町の南部、美並村の北部からなっている。

農地では、長良川の上流域及びその支流の板取川上流域の各河川に沿って分布している。

土地の利用状況は、大部分が山林、原野によって占められており、全面積に占める農耕地の割合は、板取村は0.4%、八幡町の2.7%、大和町は3.7%、美並村では3.3%と県の平均6.2%ををたまわっている。

農地のうち、水田は板取村は51.9%で低いが、八幡町の70.7%、大和町は80.0%、美並村では77.5%と県の平均75.7%に近い。水田では夏秋なすが栽培されている。

土壌は、水田土壌では、板取村に多湿黒ボク土、灰色低地土が分布している。郡上郡では灰色低地土が主体となっている。ついで多湿黒ボク土、グライ土が多く、黄色土もわずかに分布している。多湿黒ボク土は八幡町、大和町にみられる。

畑地土壌では、黒ボク土が主体であり、岩屑土も多く分布している。板取村に灰色低地土が、また、八幡町大和町に黄色土、褐色低地土が散在している。

2. 土壌統群の分布

岩屑土は板取村、八幡町的那比川および亀尾島川沿い、大和町の有巢川流域、中剣、万場の山麓傾斜地に散在し、畑地として利用されている。

畑地として利用されている黒ボク土のうち、厚層腐植質黒ボク土は八幡町の吉田川沿いに分布している。表層多腐植質黒ボク土及び表層腐植質黒ボク土は板取村、八幡町、美並村に多く分布し、大和町に散在している。

又、水田として利用されている多湿黒ボク土のうち、表層腐植質多湿黒ボク土は板取村に、八幡町は各地に点在し、大和町では栗巣川沿い等に比較的

多く分布している。

黄色土のうち水田として利用されている細粒黄色土・斑紋ありは八幡町、大和町に分布しているが多くはない。畑地として利用されている細粒黄色土は大和町に、礫質黄色土は八幡町に分布している。

褐色低地土のうち、中粗褐色低地土・斑紋なしは八幡町、大和町の畑地に点在分布している。

灰色低地土のうち、細粒灰色低地土・灰色系は八幡町東部および南部に、大和町および美並村に比較的広くみられる。中粗粒灰色低地土・灰色系および礫質灰色低地土・灰色系は板取村の大部分の水田を占める。八幡町、大和町にも分布する。礫質灰色低地土・灰褐色系は八幡町の東南部、大和町北部に灰色低地土下層黒ボクは八幡町、大和町に点在し、水田として利用されている。

畑地として利用されている灰色低地土・斑紋なしは板取村にわずかに分布している。

グライ土のうち、細粒強グライ土は八幡町、大和町、中粗粒強グライ土は八幡町、大和町、礫質強グライ土は美並村にみられる。細粒グライ土のうち中粗粒グライ土は大和町に広く分布し、水田として利用されている。

3. 土壤群別細説

(1) 岩屑土 (01)

土性は強粘質～壤質、30cm以内から砂礫層となり、山地・丘陵地斜面に分布する。一般に排水は良好であるが、土壤は浅い。桑園・樹園地等に利用されているが、表土の厚さ、有機物含有量、養分の保持力等の面で欠陥が認められる。

(2) 黒ボク土 (03, 04)

土性は壤質～粘質、腐植含有量は富む～頗る富む。母材は火山噴出物からできた土壤で、保肥力が高いが、磷酸や塩基類に乏しい(03)。多湿黒ボク土(04)は台地凹部または沖積低地凹部に分布し、排水不良が加わる。

(3) 黄色土 (10)

土性は強粘質～壤質、腐植含有量は少ない。土色は黄色味が強く、丘陵地斜面に分布し、強酸性で塩基類に乏しく、保肥力、養分供給力等に欠陥がある。

(4) 褐色低地土 (12)

土性は強粘質・粘質・壤質・砂質と変化が大きい。土色は、ほぼ全層が褐色を示し、微高地に分布し、排水は良い。腐植含有量は少ない。

(5) 灰色低地土 (13)

土性は強粘質・粘質・壤質・砂質と変化が大きく、土色は、ほぼ全層が灰色または灰褐色を示す。

沖積地帯に分布し、地下水位はグライ土に比して低く、排水は良く、腐植含有量は少ない。この土壌は保肥力が強く、養分供給力に富み、水田として高い水稻生産力を示す。

(6) グライ土 (14)

土性は強粘質・粘質・壤質・砂質で変化が大きい。土色は青灰色で、グライ層が現れる位置で細分化される。沖積地帯に分布し、地下水位は高く、排水は悪い。腐植含有量は概して少ない。

4. 市町村別土壤統群面積一覧表

(1) 水田の部

市町村名	土 壤 群	土 壤 統 群 名	土壤群 番 号	分布面積 (ha)	備 考
板 取 村	多湿黒ボク土	表層腐植質多湿黒ボク土	0437	11	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。(当図幅にない土壤統は左記の記載を省いた。)
	灰色低地土	中粗粒灰色低地土、灰色系	1309	8	
		礫質灰色低地土、灰色系	1312	38	
八 幡 町	多湿黒ボク土	表層腐植質多湿黒ボク土	0432	77	同上
	黄 色 土	細粒黄色土、斑紋あり	1017	30	
	灰色低地土	細粒灰色低地土、灰色系	1305	30	
			1306	186	
		中粗粒灰色低地土、灰色系	1309	30	
		礫質灰色低地土、灰色系	1311	20	
			1312	15	
		灰褐色系	1321	5	
			1322	74	
		灰色低地土、下層黒ボク	1324	23	
	グライ土	細粒強グライ土	1402	6	
			1403	15	
		中粗粒強グライ土	1405	25	
大 和 町	多湿黒ボク土	表層腐植質多湿黒ボク土	0432	19	同上
			0437	109	
	黄 色 土	細粒黄色土、斑紋あり	1015	35	
			1017	40	
	灰色低地土	細粒灰色低地土、灰色系	1305	42	
			1306	4	
		中粗粒灰色低地土、灰色系	1308	55	
			1309	12	

市町村名	土 壤 群	土 壤 統 群 名	土 壤 群 番 号	分 布 面 積 (ha)	備 考	
大 和 町	灰色低地土	礫質灰色低地土、灰色系	1 3 1 1	5	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。(当図幅にない土壌統は左記の記載を省いた。)	
			1 3 1 2	27		
			灰 褐 系	1 3 2 1		25
			1 3 2 2	1		
		灰色低地土、下層黒ボク	1 3 2 4	12		
	グライ土	細 粒 強 グ ラ イ 土	1 4 0 3	25		
			中 粗 粒 強 グ ラ イ 土	1 4 0 5		15
			細 粒 グ ラ イ 土	1 4 1 5		20
中 粗 粒 グ ラ イ 土			1 4 2 3	10		
美 並 村	黄 色 土	細粒黄色土、斑紋あり	1 0 1 7	32	同上	
	灰色低地土	細粒灰色低地土、灰色系	1 3 0 6	39		
	グライ土	細 粒 強 グ ラ イ 土	1 4 0 3	25		
礫 質 強 グ ラ イ 土			1 4 1 3	29		

(2) 畑地の部

市町村名	土 壤 群	土 壤 統 群 名	土 壤 群 番 号	分 布 面 積 (ha)	備 考
板 取 村	岩 屑 土		0 1 0 1	30	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。(当図幅にない土壌統は左記の記載を省いた。)
	黒 ボ ク 土	表層多腐植質黒ボク土	0 3 1 3	20	
	灰色低地土	灰色低地土、斑紋なし	1 3 3 7	9	
八 幡 町	岩 屑 土		0 1 0 1	70	同上
	黒 ボ ク 土	厚層腐植質黒ボク土	0 3 0 5	40	
			0 3 0 8	90	
		表層腐植質黒ボク土	0 3 2 6	30	
			0 3 3 8	20	
黄 色 土	礫 質 黄 色 土	1 0 1 0	44		

市町村名	土 壤 群	土 壤 統 群 名	土 壤 群 番 号	分 布 面 積 (ha)	備 考
八 幡 町	褐色低地土	中粗粒褐色低地土、斑紋なし	1 2 0 3	9	
大 和 町	岩 屑 土		0 1 0 1	110	当図幅における分布面積は左記の分布面積の一部である。(当図幅にない土壌統は左記の記載を省いた。)
	黒ボク土	表層腐植質黒ボク土	0 3 3 8	10	
	黄色土	細粒黄色土	1 0 0 4	40	
	褐色低地土	中粗粒褐色低地土、斑紋なし	1 2 0 3	26	
美 並 村	岩 屑 土		0 1 0 1	4	同上
	黒ボク土	厚層腐植質黒ボク土	0 3 0 8	23	
		表層多腐植質黒ボク土	0 3 1 3	35	
		表層腐植質黒ボク土	0 3 3 7	27	

5. 資料

- (1) 岐阜県農業試験場 (1968) 水田及び畑地土壌生産分級図
- (2) 岐阜県農業試験場 (1979) 地力保全基本調査総合成績書
- (3) 農業技術研究所化学部土壌第3科 (1983) 農耕地土壌の分類—土壌統の設定基準及び土壌統一覧表 (第2次案改訂版) —
- (4) 土壌保全調査事業全国協議会 (1986) 土壌断面をどう見るか
- (5) 東海農政局岐阜統計情報事務所 (1994) 岐阜農林水産統計年報 平成5年～平成6年
- (6) 福富敏雄 (1991) 岐阜県の耕地土壌の実態と改善対策

IV 土地利用現況

1 農地

本図幅内には、長良川が図幅東部を北から南に流れ、吉田川、小駄良川、那比川、亀尾島川などの支川がほぼ東西に流れ、本流の長良川と合流している。また、図幅西部には、板取川が南に流れている。

農地は、これら河川に沿って分布しているが、大和町内の長良川沿いになりまとまった農地が見られるものの、他の地域では、地形的な制約もあり川沿いに細長く分布している。特に、板取川沿いは農地がわずかに点在しているのみである。

これらの農地のうち、東部の長良川沿いでは、平坦地は水田として利用され、その他の山間地域では、畑、果樹園などに利用されており、大根、ナス、トマトなどの野菜や茶などの工芸農作物が栽培されている。また、西部の板取川沿いでは、平坦部が少ないことから果樹園などの利用が多く、キウイフルーツを中心とした果樹栽培が行われている。

2 林地

本図幅内の林野率は高く、洞戸村、美並村を除く5町村で90%を越えており、板取村では97.5%と非常に高くなっている。

所有形態では、地域内の7町村で民有林の比率が98.0%と高く、国有林はわずかであり、本図幅内でも美山町、板取村、大和町、美並村に点在するのみである。

林地の約半分は人工林で、図幅全体に分布しており、植生はスギ、ヒノキである。天然林の植生は広葉樹がほとんどで、西部では、ミズナラが多く、長良川沿いより東部ではコナラが多い。

本図幅内には、近年県内に多いゴルフ場やスキー場などの開発はなく、目立った土地利用は見られないが、東海北陸自動車道が平成8年に八幡ICまで開通する予定であり、今後、周辺地域の開発が進むものと思われる。

3 市街地・集落等

本図幅東部を北から南に流れる長良川を挟んで、国道156号と長良川鉄道が並行して走り、吉田川に沿って国道472号が走っている。また、南部には国道256号が東西に走っている。集落は、これら鉄道や国道沿いと板取川、小駄良川などの河川に沿って点在している。このうち、八幡町内の長良川と吉田川が合流する地域は、江戸時代には郡上藩の城下町として栄えたところで、かなり大きな市街地を形成し、現在でもこの地域の中心地となっている。

1996年3月

印刷発行

岐阜県土地分類基本調査

「八 幡」

発行 岐阜県企画部地域振興課

〒500-70 岐阜市藪田南2-1-1

電話 (058) 272-1111

印刷 日新印刷株式会社

岐阜市蔵前2丁目3番1号